

I セット5 過程方式

必要におうじてお読みください

3年A漢字 「勝」 についての解説

(文責：乗木養一)

「勝」授業案作成の観点

こどもの状況	こどもの生活や学習などで、この字に触れた経験があるかどうか、どのくらい知っているかなどを、推測したり、把握したりしておく。 (例1) ラインサッカーで、Aチームが3対2で勝った。 (例2) 「勝ち負けよりも大切なことがある」と先生が言っていた。 (例3) 名まえに「勝」がつく子がクラスにいる。
指導の重点	指導時間、字種の特質、本時までの学習履歴、評価のポイントなどをもとに「最低何がわかり、できればよいのか」をあきらかにしておく。 (例1) こみいった字形であり、字体をよく観察し正しく書けるようにする。 (例2) 意味を理解し、「勝ち負け」「勝負」などの語を適切に使うことができるようにする。
予告と導入	学習の見通しをもてるようにする、意欲を喚起するなどのために、予告をおこなうかどうか検討しておく。
	授業の核心にひきこむインパクトある導入をくふうする。 (例) 「勝」の授業実践記録と解説 P. 11 参照。
指導の順序	5過程のつながりがスムーズで、思考の流れが円滑になる順序にする。 (例) 「勝」の授業実践記録と解説 P. 11 参照。
学びの場の形成	「個別学習 = 集団での学習」の区別とつながり。 他者へのマナーとともに、授業のルールを身につける。 (例) 「勝」の授業実践記録と解説 P. 11 参照。
板書	授業全体の枠組みがわかり、思考(=発見)をうながす板書にする。 (「音・意味・字形・コトバ・文」を連動させる。) (例) 「勝」の授業実践記録と解説 P. 2 参照。
評価	テスト→再指導を通じて、定着をはかる。 (例) 「勝」の授業実践記録と解説 P. 12 参照。

字種「勝」について

読みかた P. 2	読みかたは、音読みの「ショウ」と、訓読みの「かつ」である。「まさる」は中学校で学ぶ。 「勝つ」の送りがなのつかいかたは比較的容易といえる。
意味 P. 3	明解である。核となる意味は《かつ》。訓の「勝つ」があらわす。対義字は同じ3年配当の「負」。関連づけて指導したい。
字源説 P. 3	小学校3年での学びには適当ではない。諸説にくいちがいがあまりみられないが、字体の変転が複雑な過程をへている。 部首は「力」,「月(舟)」は「ふなづき」。
字形 P. 3	複雑な構成要素で組み立てられており、習得に困難さがともなうとみられる。
習得状況 P. 5	1年後にあたる4年生当初の段階で、音訓ともに読みは8割以上だが、書きは5割以下と課題がある。
語イ P. 5	学級づくり・なかまづくりに役立つ生活に根ざした語が散見される。スポーツやゲームなどでつかわれる語も少なくない。 一方で論理語イを形成する語はみられない。教育基本語イに「勝利」「得手勝手」が選ばれているが、どちらも高学年相当としている。

1. 読みかた

音：ショウ
訓：か - つ
まさ - る

【注】「まさる」は
中学校で学ぶ。

同音の漢字：上①高，小①，正①，生①，青①高

少②，声②高，星②中

昭③，相③中，消③，商③，章③

○数字：配当学年，小学校4年配当以降を略

中：中学校段階指導音訓，高：高等学校段階指導音訓

◎読みかたは、音読みの「ショウ」と、訓読みの「かつ」である。

◎「ショウ」と読む同音漢字と、とりちがえるケースは、比較的少ない。

◎和語の語幹・活用語尾と【送りがなのつけかた】

か・つ 【勝つ】 〈自動詞五段〉

名詞の「かち」も【勝ち】と表記する。(動詞「かつ(勝)」の連用形の名詞化。)
複合語には、「勝名乗り」「勝越し」のように「ち」を送らない表記がときにみられるが「ち」を送るのが標準である。

2. 意味

〔参考〕 P. 9「意味概括」

意味は、明解である。核となる意味は《かつ》。訓の「勝つ」があらわす。
対義字は「負③」と「敗④」。○数字：配当学年。

基本的な意味	1 たたかに勝つ。 相手よりも力がある。	勝利(する)。 勝負(する)。 優勝(する)。
派生した意味	2 すぐれる。 ふつうよりも力がある。 よい状態にある。	健勝。 殊勝。
	3 ながめがよい。 美しいすぐれた場所。	名勝。 景勝地。

「勝」の日本語における核となる基本的な意味は、**1**《たたかに勝つ》
《相手よりも力がある》で、和語「かつ」があてられている。

2《ふつうよりも力がある》《すぐれる》《よい状態にある》ことから「まさる」があてられ、転じて**3**《ながめがよい》の意味が定着していった。

小学校3年の理解語イ・使用語イからすると、**1**を軸に指導するのがのぞましい。

3. 字源説

「勝」の字源について諸説にあまりくいちがいがみられないが、字体の変転が複雑な過程をへている（当初「乗+力」だったものがのちに「朕+力」となったという）。小学校3年の学習には適当といえない。

部首は「力」、構成要素にある「月（舟）」は「ふなづき」だが、これも明確な根拠はない。〔参考〕P. 14「字形の変転と字源説」、P. 15「ふなづき」

4. 字形

複雑な構成要素で組み立てられており、習得に困難さがともなうとみられる。

◎ 字体

学年別漢字配当表

康熙字典体

常用漢字表体

標準的な楷書

(現行字体)

5. 習得状況

4年生当初の段階で、音訓ともに読みは8割以上だが、書きは5割以下と課題がある。

(1) 1964年 - 1969年 文化庁調査

調査問題「勝つ」読み97%、書き43% (調査対象：小学校4年生)
文化庁国語シリーズ『児童・生徒の読み書きのカー当用漢字について』(1972年)

(2) 1982年 - 1984年「国立国語研究所調査」(東京都の集計)

	漢字	音訓	調査問題	1年下	到達度	1年上	2年上	4年上
読み	勝	ショウ	勝負	24.8	80.5	86.8	92.9	97.5
	負	フ	勝負	7.0	80.0	76.6	78.1	89.0
	勝	かーつ	勝つ	28.7	97.0	97.7	100.0	100.0
書き	勝	ショウ	勝負をつける	0.6	43.0	27.4	43.2	72.0
	負	フ	勝負をつける	0.0	77.0	57.1	68.8	83.0
	勝	かーつ	試合に勝つ	1.3	41.0	37.5	49.1	75.5

調査実施時期：1年下(小学2年11月)、到達度(小学4年4月)、
1年上(小学4年11月)、2年上(小学5年11月)、4年上(中学1年11月)
国立国語研究所報告95『児童・生徒の常用漢字の習得』(1988年)

「勝」は、読みの習得率が高いが、書きは5年生になっても50%以下である。

6. 語イ(漢字語の意味・接触体験の確認・価値)

学級づくり・なかまづくりに役立つ生活に根ざした語が散見される。

一方で論理語イを形成する語はみられない。教育基本語イに「勝利」「得手勝手」が選ばれているが、どちらも高学年相当としている。

(別ファイル「[指導語検討資料](#)」参照)

指導に重点をおきたい語

○数字は、小学校配当学年。

【勝つ】	
① 戦ってあいてを負かす。 戦ってあいてに負けない。 勝利を得る。 ⇨負ける。「負③」	しあいに勝つ。 きょうそう(競争)に勝った。 赤組に勝てる。 悪に勝つ。 リレーでAチームが勝つ。 ストレートで勝つ。 強い者が勝つとはかぎらない。
② 努力しておさえつける。 ⇨負ける。	病気に勝つ。 自分の弱さに勝つ。 ゆうわくに勝つ。
③ その傾向を強くもつ。	青みの勝った色あい。

「勝つ」の活用（赤字が辞書形）

	非過去		過去	
	肯定	否定	肯定	否定
ふつう形	勝つ	勝たない	勝った	勝たなかった
ていねい形	勝ちます	勝ちません	勝ちました	勝ちませんでした
可能動詞 ふつう形	勝てる	勝てない	勝てた	勝てなかった
ていねい形	勝てます	勝てません	勝てました	勝てませんでした

【勝ち負け】		勝（かち） → 負（まけ）	「負③」
①	勝つことと負けること。 勝ちか負けか。 勝負の結果。 ≡勝負。 ≡勝敗。「敗④」		勝ち負けにはこだわらない。 勝ち負けは問題でない。 勝ち負け(=勝つことを)を争う。 勝ち負けをきそう。 勝ち負けがつく。

【勝負】		勝（かつ） → 負（まける）	「負③」
①	勝つことと負けること。 勝ちか負けか。 勝ち負けの結果。 ≡勝ち負け。 ≡勝敗。「敗④」		勝負を争う。 （一気に）勝負をつける。 勝負がつく。 勝負あった。
②	スポーツやゲームなどで、勝ち負けをあらそうこと。たたかい。 ≡試合。 ≡対戦。		（ここ一番の）勝負に出る。 しんけんに勝負する。 実力で勝負する。 力の差がありすぎて勝負にならない。 一対一で勝負する。 勝負の世界に生きる。

【勝り】（勝利）		勝（かつ） = 利（つごうがよい）	「利⑤」
①	たたかいや試合に勝つこと。「試④」 ≡勝ち。 ⇔敗北。「敗④」		勝利をえる。 勝利をおさめる。 勝利を目前にする。 勝利につながる。 …の勝利に終わる。
	≡勝つ。		…に勝利する。

おもな複合語

【勝利投手】勝ち投手。⇔敗戦投手（=負け投手）。

【勝利者】勝負、競争などに勝った者。勝者。⇔敗北者。

【大勝利】大きく差をつけて勝つこと。圧倒的な勝利。≡大勝。

〔参考〕 P. 12「勝負」と「勝敗」、P. 13「勝利」と「敗北」、「負ける」と「敗れる」

3年A漢字

勝

必要におうじてお読みください

参考項目・参考情報

(文責：乗木養一)

おもな内容	ページ
1. 国字研精選案	7
2. 配当学年の推移	8
3. 使用状況・出現頻度	8
4. 意味概括と語例	9
5. 和語の転成・派生・複合	10
6. 各教科に登場するおもな語	11
7. 「勝負」と「勝敗」, そのちがい	12
「勝利」と「敗北」	13
「負ける」と「敗れる」	13
8. 字体の変転と字源説	14
つき・にくづき・ふなづき	15
9. 類義字と並列語 (類義のならば)	16

1. 国字研精選案

国字研精選案における「勝」の位置づけ

	1978年8月	「小学校600漢字, B 基本漢字」に選択 (大久保忠利第1次私案)
	1978年12月	「小学校758漢字」に選択 (見城慶和・関可明修正案)
	1984年4月	「小学校600漢字」に分類 (小学校第1次素案)
	1987年8月	「小学校で書けるようにする漢字」に分類 (日野児言研案をもとにした小学校第2次素案)
旧精選案	1988年8月	「小学校で書けるようにする漢字・614字」に選択 (小学校第3次素案)
	2009年8月	「A漢字－読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2009年改訂精選案)
	2010年5月	「A漢字－読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2010年補正精選案)
現行精選案	2017年3月	「A漢字－読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2017年学習指導要領改訂に対応の精選案)

一貫してAランク「読み書き両方の力を定着させる」漢字としている。

これまでの国字研「教育漢字精選案」作成の経過については下記参照。

[教育漢字をABCにランク分けし、指導内容に差をつける](#)

2. 配当学年の推移

現在まで、小学校3年配当で一貫している。

小学校学習指導要領の配当学年の推移

告示	実施・使用開始	学習指導要領・教科書		教育漢字数
	1947年4月	学習指導要領(試案)	[注1]	3年 684
	1951年4月	小学校学習指導要領(試案)	[注2]	881
1958年	1961年4月	小学校学習指導要領		3年 881
1968年	1971年4月	小学校学習指導要領		3年 996
1977年	1980年4月	小学校学習指導要領		3年 996
1989年	1992年4月	小学校学習指導要領		3年 1006
1998年	2002年4月	小学校学習指導要領		3年 1006
2008年	2011年4月	小学校学習指導要領		3年 1006
2017年	2020年4月	小学校学習指導要領		3年 1026

[注1] 1947年『文部省著作国語教科書』第6期国定読本(いいこ読本)の提出学年と教育漢字数である。

[注2] 「881字」は、義務教育期間中の指導字数である。「勝」もふくまれていた。

3. 使用状況

比較的、日常生活のうえでは、なじみのある字と推認される。
 スポーツ関係の記事で多用されることから新聞には多く出現する。
 教科書での出現例は586位で、かならずしも多いというわけではない。

1. 現代新聞の漢字 (「現代新聞の漢字」国立国語研究所 1976年)

1966年1月1日付け～1966年12月31日付けの「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」3紙の朝夕刊全紙面につかわれた漢字を異なり字種ごとにまとめ、順位づけている。
 それによると「勝」は、つぎのような順位となっている。

全体順位 **198位**, 全体使用率 1.251%
 層内順位 政治559位, 社会498位, 経済762位,
 文化家庭464位, 運動芸能14位, 広告670位

2. 漢字出現頻度 (「漢字出現頻度表」文化審議会国語分科会 2008年)

2010年常用漢字表改定の際に、文化審議会が改定作業に使った資料。審議では、一般の書物である「凸版(3)」調査を基本資料とし、他の調査を補助資料と位置づけた。

全体順位 凸版(3)調査: 2004年から2006年までに凸版印刷が製作した864冊分の組版データにおける順位。

層内順位 **新聞調査**: 2006年10月1日から11月30日の期間の朝日新聞と読売新聞の紙面データにおける順位。

ウェブデータ: 2007年2月, 4月, 6月のウェブサイトのデータにおける順位。

教科書: 凸版(3)調査のうち教科書のみデータにおける順位。

全体順位 **282位**
 層内順位 朝日新聞56位, 読売新聞80位,
 ウェブデータ179位, 教科書586位

4. 意味概括と語例

◎ 全体をつらぬく核となる意味 《か つ》

A 基本的な意味

かつ

《相手よりも力がある》《たたかいに勝つ》《相手をうちまかす》《優位をしめる》

【勝＝利】勝つこと。≡ victory → 敗北

もとは仏教用語。すぐれた利益。「勝」はすぐれる、「利」は利益[りやく]の意。

【勝→負】①勝ち負け。②勝敗をあらそうこと。≡ game

【勝→敗】勝ち負け。勝負。

【勝→算】勝てるみこみ。

【決←勝】最終的に勝負を決めること・試合。≡ the finals

*決勝戦。決勝点。決勝線(goal line)。準決勝。

【優＝勝】(する)競技などで、第1位となること。≡ championship

*優勝決定戦。初優勝。準優勝。

【勝つ】①戦ってあいてを負かす。

②努力しておさえつける。「おのれに勝つ。」「病気に勝つ。」

*「克つ」とも書くことがあるが、表外訓である。

③その傾向をつよくもつ。「青みの勝った色あい。」

【勝る】くらべてみてほかのものよりうえである。すぐれている。

「相手より勝る」→おとる(劣る)。

B 派生義

すぐれる

《ふつうよりも力がある》《まさる》《超越する》《よい状態にある》

【健＝勝】健康で元気なこと。

【殊＝勝】けなげで感心なようす。

【優勝劣敗】生存競争ですぐれた者が栄え、おとった者がほろびること。

【聞きしに勝る】他のものよりも程度が上である。

B' 派生義

すぐれる

《ながめがよい》《美しい場所や境地》《すぐれた景色》

【名＝勝】景色がすぐれた所。

【景▷勝】景色が(主語)すぐれていること(述語)。*景勝地

* その他

【勝手】①台所。≡ kitchen ②ぐあい。「使い勝手」

③(名詞・形容動詞)自分の思うままにふるまう。

あて字と考えられる。

【得手勝手】(名詞・形容動詞)わがまま。

5. 和語の転成・派生・複合

かち

かち【勝ち】(名) 動詞「かつ(勝)」の連用形の名詞化。

「白組の勝ち」 → 負け。

がち (接尾) 名詞または動詞の連用形まれに連体形、形容詞の連体形などについて「そうなることが多い」という意味を表す。かな表記が標準。

「おくれがち」「病気がち」「遊びがち」「雨がち」「ありがち」「忘れがち」

かつ

複合動詞

うちかつ【打ち勝つ】自動詞 ①手強い相手や大きな困難に、勝つ。

②野球・テニスなどで、激しい打ち合いのすえ勝つ。

かちあがる【勝ち上がる】自動詞 勝って、次の段階へと上がる。

かちえる【勝ち得る】他動詞 努力して名声・成功・信用・勝利などを得る。

かちこす【勝ち越す】自動詞 ①勝ち数が負け数を上回る。→負け越す。

②競技で、得点が相手を上回る。→負け越す。

かちすすむ【勝ち進む】自・他動詞 勝って、次の段階へ進む。

かちとる【勝ち取る】他動詞 勝って、自分の物にする。

かちぬく【勝ち抜く】自・他動詞 ①相手に次々と勝つ。

②最後まで戦って勝つ。

かちのこる【勝ち残る】自動詞 試合や勝負に勝って、次の戦いに残る。

かちほこる【勝ち誇る】自動詞 勝って、おおいに得意になる。

せりかつ【競り勝つ】自動詞接戦の末、勝つ。→競り負ける。

かち

複合名詞など

かちいくさ【勝ち戦】名 →負け戦。

かちうま【勝ち馬】名

かちかた【勝ち方】名 →負け方。

かちき【勝ち気】名、形動

かちぐみ【勝ち組】名 →負け組。

かちこし【勝ち越し】名 →負け越し。

かちっぱなし【かちっぱなし】名

かちてん【勝ち点】名

かちとうしゅ【勝ち投手】名 →負け投手。

かちどき【勝ちどき】名

かちなのり【勝ち名乗り】名

かちぬき【勝ち抜き】名

かちぼし【勝ち星】名 →負け星。

かちまけ【勝ち負け】名

かちみ【勝ちみ】名

かちめ【勝ち目】名

おおがち【大勝ち】名 →大負け。

ぎゃくてんがち【逆転勝ち】名 →逆転負け。

はやいものがち【早い者勝ち】名

まけるがち【負けるが勝ち】句

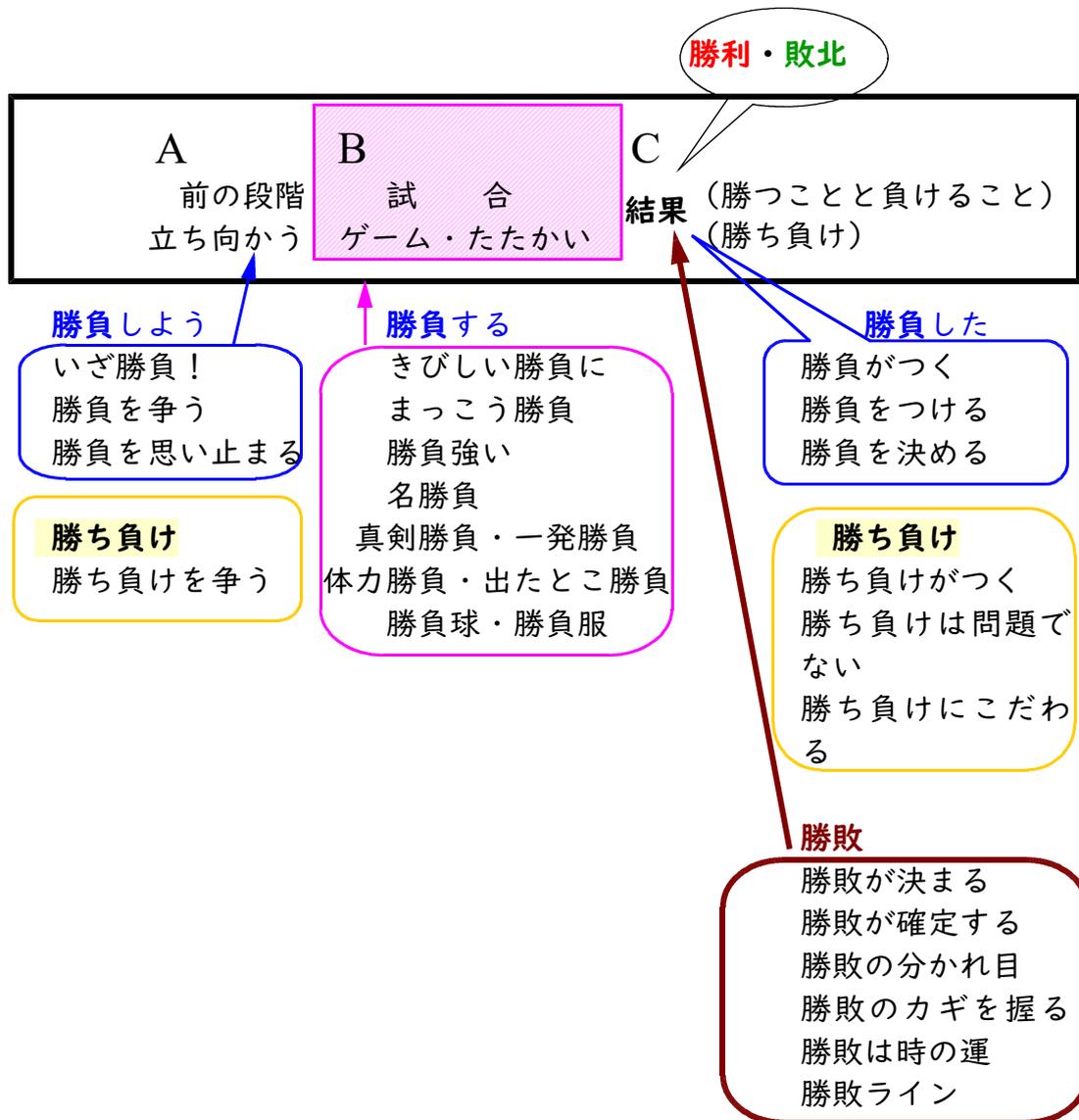
われがちに【我がちに・我勝ちに】副

6. 各教科に登場するおもな語

小学校 6年国語	イーハトーヴの夢	暴れる自然に 勝つ ためには、みんなで力を合わせなければならない。力を合わせるには、たがいにやさしい心が通い合っていないなければならない。そのやさしさを人々に育ててもらうために、賢治は、たくさんの詩や童話を書いた。
	柿山伏	狂言の「柿山伏」は、空腹のあまり、他人の柿の木に登って、 勝手に 柿を食べてしまった山伏が、その持ち主にこらしめられるお話です。
中学校 社会	第1次世界大戦	イギリス、フランス、イタリア、日本が常任理事国となりました。しかし、 戦勝国 の利害が優先され、ヨーロッパ以外の民族自決は、あまり考慮されませんでした。
	差別からの解放をめざす運動	みずからの手で人間としての平等を 勝ち取る 。
高等学校 古文	大鏡（弓争ひ）	（原文）中の関白殿、また、御前に候ふ人々も、「いまふたたび延べさせ給へ。」と申して、延べさせ給ひけるを、 ／（現代語訳）中の関白殿（＝道隆）も、また、御前にお仕えする人々も、「もう二回〔勝負を〕延長なさいませ。」と申し上げて、延長なされたのを、
高等学校 数学	確率論の歴史	パスカルとフェルマが考えた 勝点の問題 。
高等学校 社会 地歴	四大公害裁判	いずれも原告（被害者）側の 勝訴 に終わった。
	太平洋戦争	この海戦で、日本側は航空母艦4隻を失うという大打撃を受けたが、海軍当局は、敗北を嚴重に秘匿し、政府側にも真相を知らせず、国民には報道機関を通じて 勝利 のごとく発表した。
	太平洋戦争	政府・軍部は、戦局の悪化について真相を国民に知らせず、「 必勝の信念 」を説いたが、生活必需品の欠乏や食糧の不足は深刻化し、国民の戦意はしだいにおとろえていった。
	ローマ帝国	帝政期の民衆のあいだにはミトラ教やマニ教など東方から伝わった神秘的宗教が流行したが、そのなかで最終的に 勝ち残って 国家宗教の地位を獲得したのがキリスト教である。
	東アジア	イギリスは 戦勝 の結果、香港に軍隊を駐留させ、上海などの開港地には商業のための根拠地を得て、東アジアにはじめて軍事的・経済的な拠点をきずいた。
	国際連盟	国際連盟は、全加盟国によって構成される総会と、大戦の 戦勝国 などによる理事会、連盟の行政事務を行うために常設される事務局によって構成された。
第2次大戦後の ヨーロッパ	イギリスでは、1945年7月の選挙で労働党が 圧勝 し、チャーチルにかわってアトリーが首相になり、重要産業の国有化、広範な社会福祉制度の確立をはかった。	

7. 「勝負」と「勝敗」、そのちがい

「勝負」も「勝敗」もどちらも《勝つことと負けること》《勝ち・負け》の意味で共通します。「勝負」は、これから勝ち負けにたちむかうときや、じっさいにあらそっているとき、結果がでたあとにつかわれるなど、場面が広く、「勝敗」は、勝ち負けの結果だけにかぎられます。



「勝負」「勝敗」ともに C 《勝つことと負けること・勝ち負け》という意味で共通しますが、「勝負」には、B 《勝ち負けを決めること・たたかうこと・あらそうこと》という意味もあります。

その「勝負」Bに通じるのは「試合」「取り組み」「手合わせ」「戦い」、外来語の「ゲーム game」「マッチ・match」「コンテスト contest」などです。

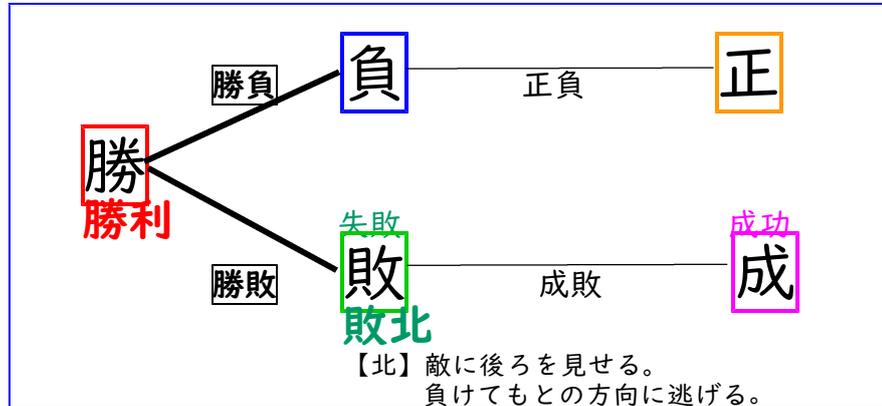
また「勝負する」ABは「競い合う」「対戦する」、外来語の「プレイ play」「ファイト fight」などに意味がかさなります。

これらは「勝敗」にはかさなりません。

「勝利」と「敗北」

にたようなケースは「勝利」と「敗北」とのあいだにもみられます。どちらも《勝ち負けの結果》にかかわるコトバです。《勝利したか敗北したか》が「勝敗」ですから、これらはどれも結果の意味で対義関係となっているのです。「勝利」の対義語に「負」をともなうコトバがないのは、そのことが関係しているのでしょう。

「勝」の対義字



「勝」の対義字には「負」と「敗」のふたつがあります。

「負」の基本的な意味は《おう・せおう》で、そこから派生して《まける》という意味となりました。さらに「負数→正数」のように《マイナス》という意味ももつようになりました。

また「敗」の基本的な意味は《やぶる・こわす・うちまかす》で、派生して《やぶれる・まける》という意味ができ、さらに《しくじる・やりそこなう》という意味ももちました。そこで対義字には「成」もあり、古典語には「成功と失敗」という意味の「成敗」[せいはい]というコトバがありました。

「負ける」と「敗れる」のちがい

和語の「まける（負ける）」と「やぶれる（敗れる）」のちがいは、どうでしょう。どちらも「勝つ」の対義語で、《勝ち負けの結果》にかかわるコトバです。《相手と戦ったり争ったりしてきそった結果、力やわざの程度が低くて、それ以上戦ったり争ったりすることができなくなる》、つまり《敗北する》ことです。

つかわれる範囲でみると「負ける」のほうが広く、「敗れる」のほうがかぎられています。

また、どちらかというとな「負ける」が日常的・口語的で、「敗れる」のほうがやや、かしこまった、かたい言いかたといえます。

敗北する	◎一点差で負ける。 ◎横綱に負ける。 ◎じゃんけんに負ける。 ○下位チームに負ける。	◎一点差で敗れる。 ○横綱に敗れる。 ○じゃんけんに敗れる。 ◎下位チームに敗れる。
敗退する	○一回戦で負ける。	◎一回戦で敗れる。
圧倒される	◎腕力に負ける。	
おさえられなくなる	◎冬の寒さに負ける。 ◎誘惑に負ける。	

8. 字体の変転と字源説

1. 字体の変転

A	B	C	D	E	F	G
						
金文		楚系簡帛	小篆	秦系簡牘	隸書	楷書
BC4世紀	BC3世紀	BC4世紀	BC3世紀	BC3世紀	BC2世紀	8世紀

乗
力



朕
力

「勝」にあたるものは、甲骨文にはみられません。

A B C は、どれも構成要素が上下にわかれ、上部は音をあらわす「乗」、下部は意味をあらわす「力」で構成される形声文字です。

近年の研究では、この場合の「乗」[ショウ]は音をあらわすためにつかわれていて、意味はなかったとみられています。

秦が公式字体としてつくった**D**では「乗」の部分が「朕」にあらためられました。なぜ「朕」になったのかは、あきらかではありません（同音だからという説が主流）。その「朕」の「月」と書かれる部分は、「舟」を變形させたものです。**D E**の「月」の部分は「舟」の印象がのこっていますが、「勝」と「舟」とは意味のうえではまったく無関係です（辞書のなかには、「舟」とおすびつけて「勝」の字源を解説するものもある）。

F Gとなると「乗」とも「舟」ともイメージできないほど変転しました。

2. 字源説

「勝」については、原義が《もちこたえる》とみる点で諸説は一致します。ところが構成要素の「朕」となると諸説がこまかくわかれます。明解な説がありません。結果として「朕」までさかのぼって「勝」の字源をかたるとなると、不透明さが増し、諸説はわかれてしまいます。小学生の学習には適当といえません。

現段階でこの字についてわかっているのは、つぎの2点にしぼられます。

① 「力」(ちから)と「朕」とを組み合わせた字である。朕の音については確証がなく、「形声文字」と断定できない。また、9画めと7画め横棒の接しかたが現行字体で「勝」と「朕」とが異なることから、指導にあたり「朕」をもちだすのは不適當といえる。そもそも歴史学習ならともかく、文字学習の対象にするような字ではない。

② 用例から、もともとの意味は《もちこたえる》ということ。ひいて現代語では《かつ》《まさる》という意味をもつ。ただし《もちこたえる》の語例は日常語にないことから、字源指導をはぶくことがのぞましい。

3. おなじ「月」でも、字体を区別しようとする流れが

楷書で「月」を構成要素にする字は、すべてが《地球の衛星》にあたる「つき」をあらわすものではありません。ながい字体の変転過程で、省略され變形され、結果として「月」と書かれるようになった字も多くあります。

漢和辞典で「月」というかたちをした部首は、ふたとおりあります。

ひとつは、天にうかぶ「つき」をあらわす「月」が部首となった【月部】（つき、つきへん）です。

もうひとつは「肉」が部首となった【肉部】（にく・にくづき）です。肉部の場合、へんなどの構成要素になったときに《肉》が変形して「月」のかたちをとり、それを意味のうえから「にくづき」とよびならわしています。

また、「舟」が構成要素となる字のなかには、「朝、服、朕、勝」のように「舟」を省略して「月」と書く字があり、この「月」を「ふなづき」とよんでいます。「舟」を部首とする【舟部】（ふね、ふねへん）には「航、般、船、舶…」などがありますが、「朝、服、朕」の部首は「舟部」から除外し、【月部】にくりいれることが習慣となっています。【肉部】のあつかいと矛盾しています。

その一方で、漢和辞典は、この「つき」「にくづき」「ふなづき」の字形を伝統的に区別してきました。

月
月
月

「つき」は、3画目と4画目の横画を短くして2画目と接していません。これを「本字」と明記しています。

「ふなづき」は、「舟」にあわせて中を「てん」にしており、「旧字」と明記しています。

そして「にくづき」は、中の横画が2画目に接するようにしています。

このような複雑でわかりにくい、こまかな違いをやめたのが「当用漢字字体表」（1949年4月28日）でした。とくに「ふなづき」とされるものは、字源にまいなことが多く、どの字も「舟」とのつながりがはっきりしません。そこで、すべて現在通用するような「月」に統一しました。学校教育でも、字源をもとにした字形の区別はしてきませんでした。

ところが2010年の常用漢字表改定で、追加漢字のうち「ふなづき」とされる「煎・嘲・喩」の3文字が旧字体のまま告示されました。同時に追加された「藤」はすでに人名用漢字として当用漢字表の字体にあわせて社会に浸透していたことから、旧字体にしていません。

煎 喩 嘲 藤

異なる「月」の字体を提示する常用漢字表
(いずれも2010年追加漢字)

このようになったことから、中学校の教科書は、常用漢字表にあわせて印刷文字を「煎・嘲・喩」と旧字体で提出するようになりました。

しかし、手書きは、新字体の「月」でかまわないことになっています。

嘲 煎 喩

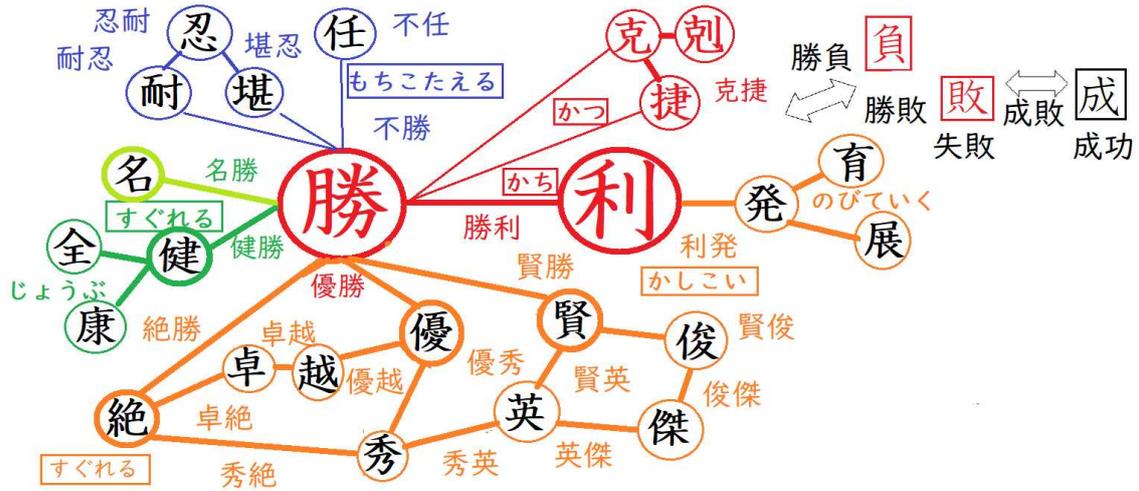
[参考]「ふなづき」とみなされるおもな字

朝②【月部】、潮⑥【水部】、嘲⑨2010【口部】、前②【刀部】、煎⑨2010【灬部】
服③【月部】、朕⑨【月部】、勝③【力部】、騰⑨【言部】、騰⑨【馬部】、藤⑨2010【艸部】
喩表外【入部】、喩⑨2010【口部】、輪⑤【車部】、諭⑨【言部】、瘡⑨【疒部】

部首は『角川新字源』改訂新版2017年による。

9. 類義字と並列語 (類義のならば)

[参考] 類義のネットワーク



もちこたえる

勝任 (任にたえる)・力能勝任 (適任である)
 不勝其煩 (そのわずらわしさに耐えられない)
 堪忍 (①不利な状況にあって堪え忍ぶこと, ②勘弁)
 忍耐 (苦難などをこらえること)
 耐忍 (たえしのぶこと)

かち

勝利 (戦いに勝つこと)
 勝→負
 勝→敗

かつ

克捷 (敵にうち勝つこと)

かしこい

賢勝 (かしこく才能があること・ひと)
 賢英 (かしこくすぐれたこと・ひと)
 賢俊 (かしこくてすぐれていること)
 俊傑 (才知などが常人よりすぐれていること)
 英傑 (才知の人並み以上にすぐれていること)

すぐれる

優勝 (①すぐれている, ②すぐれたものが他に勝つこと)
 優→劣
 優秀 (能力が非常にすぐれていること)
 優越 (他よりすぐれていること)
 秀英 (才能がすぐれていること)
 秀絶 (特別にすぐれていること)
 卓越 (群をぬいてすぐれていること)
 卓絶 (他に比べるものがないほどすぐれていること)
絶勝 (①非常にすぐれる, ②景色・地勢がきわめてよいこと)

すぐれる

名勝 (景色がすぐれた所)
健勝 (健康で元気なこと)